
華弁、ひとひら

夜見風 そなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

華弁、ひとひら

【Nコード】

N9959V

【作者名】

夜見風 そなた

【あらすじ】

本作品は、連載小説『華蘭の咲く処』の番外編になります。本編のネタバレ要素を含む場合がありますので、『華蘭の咲く処』の最新話までお読みになってから閲覧することをお勧め致します。

最後の帰郷

天弓京を出てから約一週間。右肩に槍を担ぎ、左肩に小さい荷物を背負ったその男は、愛する妻と息子の顔を思い浮かべながら西青川を渡っていた。

「おや、これはこれは。空光さん^{そらびか}じゃない。帰ってきたんだねえ！」
「お久しぶりです。お陰様で、帰って来れました」

男——空光は、西青川市場で青果店を営む女性に頭を下げた。

「ああ、そうだ。ここに、売れ残りの林檎があるからいくつか持って行きなさい」

「良いんですか？」

「もちろんだよ。あ、どうせだから全部持って行きな！」

そう言くと、女性は手に持っていた布袋を空光に差し出す。

「——こんなにたくさん。何だか申し訳ないですね」

「良いんだよ、気にしなさんな。奥さんと子供さん、三人で仲良く食べておくれ」

「ありがとうございます」

空光は礼を言つと、また青果店に寄ることを約束して女性と別れた。

”光ノ使者”になってから、既に二十年以上経った。今まで何度も人の命を殺め、返り血を浴び、殺されそうになった。しかし、故郷に戻って来る度に、空光はそれらが全て報われるような気持ちになる。

（若々しい緑に冷たい川のせせらぎ、そして、どこまでも高く透き

通るこの空……)

空光は、清々しい気分で見上げる。

(やっぱり、故郷の空気が一番おいしい)

そのまましばらく歩いていると、前方から、誰かの名前を呼ぶ声がした。

そなたか
「空高！」

空光は、その女性の声を無視して歩き続ける。「あつ、間違えたわ」と呟く声が聞こえ、再び、同じ女性の声が飛んできた。

「空光！」

「……ただいま」

”魔槍”を握っていない方の手を挙げると、空光は駆け寄ってきた女性をしっかりと抱き留めた。

「元気だったか？」

「元気だったか？　じゃないわよ、もう。最近ほとんど手紙を寄越さないものだから、いよいよ何かあったんじゃないかって心配してたのよ？」

空光から体を離し、子供っぽく頬を膨らませる彼女は、空光の愛する妻だ。

「月に一度は手紙を書いてって言ったじゃない！」

「すまん。皇居で色々あって、忙しかったんだ」

申し訳無さそうに言い訳する空光。

「——ま、良いわ。無事に帰ってきてくれたことだし、くすつ、と笑うと、空光の妻は言った。

「お帰りなさい」

「——ただいま」

二人は互いに微笑み合った。

「まあ、こんなにたくさん！」

「西青川市場の奥さんがくれたんだ」

歩きながら、空光は妻に袋の中の林檎を見せた（さつきまでは、
”魔槍”の穂先に袋を引つ掛けて持ち運んでいた）。

「嬉しいわ。今が旬だものねえ」

何度も頷きながら、今夜の夕食の献立を考える妻を見て、空光は
胸に温かいものを感じた。

他愛ない会話を交わしながら、二人は自宅近くの丘の上にやって
来た。そこからは、住宅の様子はもちろん、子供達の遊び場となっ
ている野原が見渡せる。

空光は、集団の中に一人息子を見つけた。その少年は、きやつき
やつと笑い声を上げながら、仲間達と一緒に走り回っている。

「相変わらず天真てんまは元気よ。『お父さん、まだ帰ってこないの？』

もほとんど言わなくなっただわ」

「えっ……、そりゃ寂しいなあ」

妻の言葉に、つい本音を漏らす空光だったが、たくましくなった
ものだ、と息子の姿を眺める。

「ねえ、今度は”虎鼠”（鬼おにごっこ）やろつよ！」

「いいね、やろつやろつ！」

天真と子供達は輪になり、追っ手の”虎”になる者を決めはじめ
た。

「——”虎鼠”か。懐かしいな」

空光は目を細め、優しい眼差しを見せる。

「今でも流行っているんだな」

「ふふ、そうなのよ。」

でもね、あの子達の”虎鼠”、正直言つて”虎鼠”になってないの
よ」

「……どういうことだ？」

「見ていれば分かるわ。ほら、始まるわ。天真が”虎”よ」

首を傾げたまま、空光は妻が指差す方を凝視する。

四方に散り散りになった仲間達。辺りを見渡すと、天真は「よし
っ」と頷いた。

「いっくよー！」

そう言つと、天真は勢いよく地面を蹴った。

「！ 速い」

思わず呟く空光。

その足の速さと小回りが利く小柄な体を活かし、天真は次々と“鼠”を捕まえていく。

しかし、驚くのはまだ早かった。天真は、急にしゃがみ込んだかと思うと、反動を付けて宙に跳び上がったのだ。

「わっ、上からは無し！」

最後の一人となった“鼠”の少年は、“虎”の天真が頭上にいるのを見るなり悲鳴を上げた。

「反則じゃないから良いじゃん！ つーかまーえた！」

にこつと笑つと、天真は“鼠”に向かつて飛び降り、抱き着くようにして“鼠”を捕まえた。

「ふう。全員捕まえた！」

嬉しそうに笑う天真。その息は全く乱れていなかったが、その周りにいる仲間達はぜえぜえと荒い息をしていた。

「やっぱり、天真が”虎”だと、つまんないよお」

「すぐ捕まっちゃうもんねえ……」

仲間達が口々に言う。

「……疲れちゃったし」

最後に捕まった少年も、息を長く吐きながらそのままひっくり返る。

「——あれ？ 今度は、僕が”鼠”の番じゃない？」

「そうだけど……待って、休憩」

ついに、天真を除く全員が、思い思いに野原に寝転んだ。

若干残念そうにため息をつく天真だったが、丘の上に両親が立っているのに気付き、その場で跳びはねながら手を振った。

「お父さん！ お帰りー！」

「ただいま」

空光も、天真に向かつて大きく手を振った。

天真は、仲間達と明日も遊ぶ約束をすると、全力で丘を駆け登ってきた。

「お父さん！」

天真は父親の足にぎゅつとしがみつки、顔を衣になすりつけた。

「大きくなつたな、天真」

「そりやそうだよ。お父さん、一年も戻って来なかったもん」

「そうか、一年も会ってないのか……」

空光は天真の頭をがしがしと撫でる。

「——私、今から夕食の準備をするわ。今日はごちそうよ」

「やったあ！ お肉？ お魚？ あ、林檎があるからお菓子かな？」

「はいはい、出来てからのお楽しみね。時間になったら、また呼ぶわ」

「分かった」

妻が丘を下っていく。その後ろ姿を眺めながら、空光はその場に座った。”魔槍”を傍らに置くと、空光は静かに息を吐いた。

「お父さん。またお話を聞かせて？」

天真が、あぐらをかいた空光の足によじ登る。息子を足の上に座らせると、空光はいつものように話し始めた。

まだ十歳で好奇心旺盛な天真は、父親が帰ってくるといつも、天弓京の話や”光ノ使者”の話を聞きたがる。

この時空光は、使者達と交わした会話や天弓京で起きた出来事を中心に話し、任務に関わる話は出来るだけ避けるようにしていた。任務の内容は幼い子供に話せるようなものでは無く、また、口外することは禁じられていたためである。

元々、空光は口数が少ないのだが、息子と会話する時だけは、不思議と饒舌になった。

「——それで？ その泥棒は捕まったの？」

「すぐに捕まったよ。あれは、間抜けな泥棒だった。屋根から屋根へ飛び移りながら逃げていたんだが、屋根に着地する度に、盗んだ

果物が落ちて、屋根の下へ転がっていったんだ」

「へえ。じゃあ、下にいても、どこにいるかすぐに分かっちゃうね」

「そうなんだ。だから、紅光くればいが先回りして捕まえようとしたんだ。

急に現れた紅光にびっくりして、泥棒は足を滑らせて屋根から落ちちゃったんだ」

「何それ！　ほんと間抜けだねー！」

お腹を抱えて笑い出す天真。空光もそれにつられ、声に出して笑った。

天真の笑いが収まり、二人の間につかの間の沈黙が流れる。

「——天真」

それを破ったのは空光だった。

「なあに？」

首をくいつと傾げて父親を見上げる天真に、空光は真顔で尋ねる。

「天真は、今でも、”光ノ使者”になりたいと思っているか？」

空光の問いに、天真は「うんっ」と頷く。

「昔からずっと思ってるよ。お父さんみたいな、強い”光ノ使者”になりたいって！」

「……そうか」

空光は天真の頭を撫でる。

「じゃあ、外でたくさん遊んで体力を付けなきゃな」

「うん、分かってるよ。お父さん、帰ってくるたびに言ってるもん」

「そうだったな」

「二人ともー！　夕食が出来たわよー！」

家の窓から顔を出し、声を張り上げる妻。空光は”魔槍”を右手に持つと、天真を肩車して立ち上がった。十歳にもなると、小柄な天真でもさすがに少し重い。

「高いい！　また高くなつたよ、お父さん！」

「大きくなつた証拠だな」

天真の無邪気な声を聞きながら、空光は静かに笑った。

* * *

晴天の夜空に浮かぶ三日月を眺めながら、空光は例の丘の上に寝そべっていた。妻と息子は、とつくに寝静まっている。

『昔からずっと思ってるよ。お父さんみたいな、強い』光ノ使者
”になりたいって!”

天真の明るい声が脳裏に木霊する。

（”光ノ使者”と”影ノ使者”……。確かに見た目は華やかな役職だが、正直言つて、勧めたいとは思わない）

空光は体を起こし、傍らに置いてあつた”魔槍”を手に取つた。その柄にはいくつもの染み。目を凝らさなければ分からないくらい薄いものだが、何の染みであるか、空光にはよく分かつていた。

（優れた身体能力を一番活かせるのは”光ノ使者”かもしれない。でも、あの明るい素直な性格を殺してまで、”光ノ使者”になつて欲しくない）

三日月に雲が掛かり、辺りがほんの少しだけ暗くなる。遠方からは、ふ柔らかく、どこか寂しいふくろうの鳴き声がする。

（向こうから声が掛かるうが掛からまいが、いずれ、天真はこの職に就くのだろうな……。親子で手を血に染めるのは悲しい気もするが、仕方がないことのか……）

物思いにふけっていると、次第に眠気が襲つてきた。”魔槍”に額が触れると、耳の奥で透き通つた音色が生まれた。”魔槍”を額に当てると、決まって聴こえる旋律だ。

（また、笛の音だ。——そろそろ戻って寝よう）

空光はすつと立ち上がると、ゆつくりと丘を下つていった。

* * *

二日後の朝。空光は青川平野を出発した。
その時は、天真も妻も、再び空光と会えることを全く疑っていなかった。

「お父さん、また帰ってくるよね？」

「ああ。天真がいい子にしていたら、また帰ってくるよ」

まさか、二度と会えなくなるとは……誰も考えていなかった。

「最後の帰郷 完」

最後の帰郷（後書き）

早速、『華弁、ひとひら』第一話を読んでいただき、ありがとうございます！

今後、本編と平行する形で、こちらの番外編の方も書いていきたいと思っています。

本編と同じく亀更新になりますが、よろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9959v/>

華弁、ひとひら

2011年8月22日03時38分発行